

石煉瓦のグレーの館を 「ストーリーツーリズム」の舞台に

星野 智之 (ほしの ともゆき) さん

「青い星通信社」のダイニングルームを兼ねたラウンジが、現在の星野さんの主な仕事場

北海道に移住（Iターン、Uターン）して、新たな取り組みを行う輝く人を紹介するインタビュー。お話を伺うのは、北海道各地を探訪し想いを形にする人との出会いをつなぐ、地域プロデューサーかとうけいこさん。7回目は美深町に2019年6月に生まれた「TOURIST HOME & LIBRARY 青い星通信社」の星野智之さんです。草原の中に置き忘れられたようにぼつんと残されていた廃屋を改装。静かな時の流れを過ごすことを好む旅人を誘う宿を訪ねました。

美深町とのお付き合いはどれぐらいになりますか

最初に訪れたのは確か2004年でしょうか。その後村上春樹さんをテーマにした取材などで美深町を何度も訪問しました。仁宇布じうぶのファームイン・トントが定宿でした。オーナーの柳生佳樹さんに出会ったことも、美深へ足が向く理由の一つであったことは間違いありませんね。自然豊かな一方、どこか寂しげな土地柄に魅了されました。知り合いが増え、次第に移住を意識

1963年生まれ、神奈川県小田原市出身。大学卒業後は出版社で雑誌編集・書籍制作に携わり、2009年4月～10年3月は月刊誌「東京カレンダー」（アクセス・パブリッシング）編集長、09年4月～14年3月は月刊会員誌「大人の休日倶楽部[ミドル]」（JR東日本）ディレクターを務める。19年6月、中川郡美深町に3室だけのホテル「TOURIST HOME & LIBRARY 青い星通信社」をオープン。著書に『月光川の魚研究会』（ぴあ）など。

しました。そして、17年10月にパートナーと共に移り住みました。

青みを帯びた煉瓦れんが積みの建物と出合ったとき、どんな思いを持たれましたか

ホテルを作ろうと考え始めたものの、建物の外壁のイメージが全く浮かばず、先に進めなかったのです。美深町の知り合いから紹介されたのが、この石煉瓦造りの古い2棟の家屋でした。70年近く前に警察の官舎として建てられたものらしく、廃屋と化していました。しかし、僕はこの煉瓦に心をつかまれました。この素材感を生かす設計で、ホテルを作ることが決まった瞬間です。

* ストーリーツーリズム

物語の生まれた場所を訪れ、その空気を実感する旅。

このホテルはどういう想いで作られたのでしょうか

正直、ホテルを作ることに明確な動機や構想があったわけではありませんでした。少しずつ想いが積み重なったというのが本当のところ。ただ、取材でホテルや旅館を訪れ、いろいろ見てきたので、自分が経営するとなると、妥協するわけにはいきませんでしたね。

風の音を聞きながら読書に耽る。天塩川で釣りをする。鉄道が好きな方なら宗谷本線のディーゼル車を眺めていただいてもよいですね。800冊ほどの書籍や雑誌が並ぶライブラリーがありますのでラウンジや石壁に面したカウンターや、線路が見える小部屋など好きな場所で本のページをめくってもらいたい。静けさの中に木々の枝の鳴る音やささやき合う鳥の声、ときおり通過する列車の音が心地よく響きます。五感が研ぎ澄まされるひと時を感じてもらいたい。

3室それぞれが違ってきますね

ゲストルームは3室のみで、水脈、火影、風笛と名付けました。3室のドアにはそれぞれ、その名とシンクロするような風景写真を埋め込みました。これは2008年に木村伊兵衛賞を受賞した気鋭の写真家である

岡田敦氏のオリジナルプリントです。ゲストルームにテレビは置かず、Bluetoothの小型スピーカーだけです。

開業から1年たって、今のお考えを教えてください

誰にとっても、こんな石煉瓦積みの建物に暮らすことは非日常でしょう。豪雪に耐えるための分厚い石壁の建物には、この道北の地に生きた人々の暮らしの記憶が封印されており、訪れた人にそれを感じてもらうことができれば、ホテルを作り、継続させていく意味になりえるのではないかと考えています。

宣伝は一切していないのですが、韓国の若い人たちから予約が入ることも起きています。こうした出会いを含め、予想をはるかに超えることが起きるのが楽しいです。
(2020年1月取材)

インタビュー後記

1月下旬の深い雪の季節に訪れ、一晩お世話になりました。眠るのがもったいないと思うほどの空間。ロビーから部屋に向かう途中には頭を下げないと通れない場所があったり、フワフワ感が高まります。次回は最低でも2泊3日で籠りたいです。

かとう けいこ (株)まちづくり観光デザインセンター代表



築70年ほどの2棟続きの廃屋を改装した「青い星通信社」。写真右手には宗谷本線の線路が延びている